

例では、その一つづつにおいて、サル種の相異なり、偶然的な契機でなされているが、これらを組み合わせる実験によって marrow-bone をたたき割り marrow を食す可能性を確かめることができると思われる。そして46年度は、その前段階として予備的に、まずサルが肉を簡単に食す可能性があるか—これは、フィールドでの報告例が若干あるにすぎない—を確かめるために、霊研の上記の3種類のサルに肉を与えて見た。以下その報告である。

1. red-faced monkey, capuchin monkey, chimpanzee に直接与える前に、前段階としてソーセージ(魚+肉)を与えた。chimpanzee は食しようとしませんが、他の2種のサルは手渡しで、ちゅうちょせずに食す。

2. 第二段階として、鳥肉の小片を焼いたものと水たきしたものを与えた。小片の重量は、15~30gで骨付きのもの。chimpanzee は食しないが、他2種は骨ごと、手に取って、ためすことなくバリバリと食す。chimpanzee は1と2の段階において、手に取ってためし、口をつけ、舌でなめてからする。

3. 第三段階として、鳥肉の大きな片、約200gの骨付きモモ肉を与えた。capuchin と red-faced monkey は、約30分かけ骨も残さず平らげた。

以上によりこの2種は captive 状態では、簡単に、そして好んで肉、骨、marrow を食すということが確認された。

志賀 A, B₂, C 群をめぐるとのオスサルの転出入

好広真一(京大・理・自然人類)

1) A群への転入、復帰

前年度の報告に続いて、A群(餌付け群)への転入から述べると、A群に接近しはじめるのはほとんどが5才以上、転入するのは7才以上で、1~数日だけの接近例を除き、それ以上の期間群れにくっついて歩いた個体の接近の季節は、ほとんどが交尾期である。交尾期に接近し交尾期終了前後に去り、翌年は少しはやめに接近し、といった周期を1~数年繰り返して転入する例が多い。転入は7才以上のオスの転出したあとに行なわれ、7才以上のオスが転出していないときには、接近しても転入しないことが多い。転入に際しては、オスの順位の最下位で入っている。転入個体の出身群は不明である。

A群より転出した個体のA群への復帰は3例みられるが、2例は5才および7才で、ともに1カ月で再転出し、1例は20才以上の個体で、交尾期を含め8カ月いで再転出した。

2) 給餌されない群での例

B₂群には、1972年1月現在、A群にいたことのあるオスが5頭いるが(総個体数22頭)、これを含め4才以上のオス7頭中、1969年4月以前にこの群れにいた可能性のあるものは15才以上と思われるオス1頭のみで、また現在いない少なくとも2頭のオス(ともに20才前後)が、1969年8月にはB₂群にいた。餌付いて個体数の急増したA群が近くににいるとはいえ、すべてのオスが、かなり速く入れかわることを示唆している。C群にもオスは10個体くらいいるが、A群より転入している個体はオスの順位のかなり上位を占め、この個体より順位の低いもの3頭とあわせて少なくとも4頭は、他群からの転入個体と考えられる。

3) 転出の動機

A群においては、群れ内でのオスの順位をめぐるあつれきがあるところへ、外から知りあいのオスが単独ないし他群の一員として接近したことをきっかけに転出する例が多いが、こういった群れ内外の条件がなければ転出しないというのではなく、すべてのオスが出る傾向を持っているように思われる。

ニホンザルの性行動

—コミュニケーションとして

榎本知郎(京大・理・自然人類)

ニホンザルの性行動を扱った研究には、水原(1957)、徳田(1958)、Tokuda(1961-2)、Hanby et al.(1971)などがあるがこれらは、主として社会学的見地にたっており、行動についての詳細な記述はなされていない。また、性行動をめぐる諸行動をその記号性という見地から追求したものほとんどないといってよい。私はニホンザルの餌付けされた群れを対象にして、オスとメスが出会い、交尾し、別れるまでに見られるあらゆる行動を記載し、そういった行動の連鎖の中に、行動の契機、機構、そして法則性をみいだすことを試みた。

対象・期間

志賀高原地獄谷の志賀A群:1971年10月29日~11月29日。

高崎山A, B, C群:1972年1月11日~2月7日
(なお、高崎山における調査は、霊長研の共同研究として行なった)。

方法

群れがエサ場に出ているときに、エサ場およびその周辺部において、主として発情したメスを追跡して、オスとメスのそれぞれの行動を記録した。